

「花の力」を信じ、子どもたちに「花を愛でる力」を育むために 一美しが丘西の花農家 関戸花園の取組



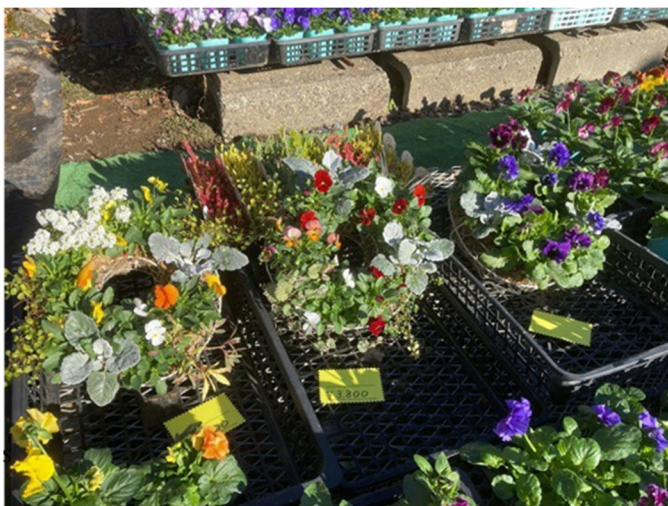
緑の葉に囲まれてスッと立つ鮮やかな色のシクラメンを見かけると、冬の訪れを感じます。

青葉区美しが丘西にある関戸花園さんは、シクラメンをはじめとするお花を生産するほか、近隣の美しが丘西小学校の子どもたちとお花を通じた交流を続けています。

花農家のあゆみと地域とのつながりについて、関戸花園で花きを担当している関戸^{せきど}裕一^{ゆういち}さんにインタビューをしました。

青葉区美しが丘西の穏やかな丘陵地に、お花を栽培するビニールハウスが 6 棟と、ぶどうや梨などを生産する果樹園が広がります。

関戸裕一さんは、この地で農業を営む関戸家の 16 代目。果樹栽培を行っている弟さんと共に、花・畑担当として農業を営んできました。園地にあるおよそ 480 坪のハウスでは、シクラメンのほか、パンジー、ビオラ、葉ぼたん、金魚草などを栽培し、花き市場や農協の直売所に出荷しているほか、農園の敷地内でシクラメン、手作りリースや野菜の苗も直売しています。



生花を使った可愛いらしいリースが並ぶ農園の直売所

■ シクラメンの品質向上と栽培の難しさ

関戸家がシクラメンの栽培を始めたのは、1967年（昭和42年）ごろのこと。関戸さんのお父様が、シクラメン栽培の先駆者の農業者へ出向いて勉強し、温室を建てたのが始まりでした。

家のお手伝いを子どものころから重ねるうちに「自然に、自分もやってみよう」と思うようになったと関戸さん。「大学は農学部で花を専攻し、卒論はシクラメンに関する」とお花の道へ一直線に進みました。大学を卒業してから、1年間シクラメン農家に住み込みで研修を受けた後、関戸花園でシクラメンの栽培を始めました。



出荷前のシクラメンがビニールハウスいっぱいに並ぶ風景は圧巻

シクラメン栽培について関戸さんは、「農協に私も所属する『花き部』というのがあって、若いころは仲間同士で講師を呼んでシクラメン栽培の勉強をしたり、シクラメン栽培の先進地に視察に行ったりしましたね。その結果、技術が向上して県や市で行われる品評会にも横浜北部の若い花農家が上位に入るようになりました」と語ります。

こうして関戸花園の質の高いシクラメン栽培が行われてきましたが、今年の栽培について話が及ぶと「アザミウマと呼ばれる害虫がなかなか駆除し切れず被害に遭いました。加えて今年の夏は暑く、ダメになってしまったものもあります」と声を落とします。

害虫を駆除するために照明を使った新しい技術を取り入れたり、網を張るなどの対策を続けているそうですが、「温室は温度管理が大変。エアコンを導入して冷房を入れている棟もあります。燃料費や肥料は値上がりし、倍近くなっています」と花農家としての悩みも語ります。



シクラメンだけで 20 種類くらい栽培しています。

株の中心に陽があたるように葉を広げ、元に戻らないようにプラスチックの輪でおさえる作業は 1 つ 1 つ手作業で行います。

11 月に植えて、出荷は翌年の 11 月下旬から 12 月とのこと。

■ 東日本大震災で感じた「花の力」

花農家としてお花の道を歩んできた関戸さんが「花の力」を一番感じたのは、2011 年 3 月に発生した東日本大震災の時でした。

「震災から 3 か月後の 6 月末、被災された方に花を寄付するために横浜市内の花の生産者有志で仙台市へ向かいました。我々生産者が作っている花の苗を 4 トントラック 2 台に載せたほか、津波の影響で資材もないため、業者など色々な人の協力で手に入れた培養土、プランターなども積んで、人はワンボックスに乗りこみ出発しました。仮設住宅を何箇所か回って『皆さんで植えましょう』と声をかけました」。

その後、10 月に同じ場所へ訪れてみると、花を植えた仮設住宅の雰囲気が、華やかに明るくなっていたと関戸さんは話します。

「震災が起きると、衣食住が優先で、それ以外の飾りなんかどうでもいいっていう風に思われがちだけど、彩りがある花が、人の心を変えらると思ったのは確かですね」。被災地での活動はその後、3 年続いたそうです。



被災地に持ち寄った草花は、花苗 300 ケース (6000 ポット)。仮設住宅で暮らす人たちがヒマワリを持ってニコニコしていたのが印象的だったそう。

■「愛でる力」を育むために—美しが丘西小学校の子どもたちとの交流

こうした、人の心持ち・心を変える「花を『愛でる力』は、若いうちから育てて欲しい」と話す関戸さん。そんな思いもあり、近隣にある小学校との交流を続けています。

関戸花園からほど近い横浜市立美しが丘西小学校は、関戸さんのお父様が開校準備委員会委員長となり、地域の方たちの要望により 2013 年に開校した小学校です。関戸花園は、開校当初から入学式や卒業式の際に校舎を彩るお花を提供してきました。

「10 ケース 200 鉢前後お渡ししています。冬に市場に出せなかったパンジーやシクラメンをプランターの土に植えておくと、春頃に元気になるので、飾ってもらえるといいなと思って始めたのがきっかけです」。

また、3 年生が「農家の仕事」について学ぶ社会科の授業で、11 月下旬に関戸花園へ見学に行くことも恒例行事です。授業では、花を育てているシクラメンの種まき、土づくり、温度の管理など、花農家の大変さや、やりがいなどを直接学ぶことができ、児童にとって貴重な機会になっています。「子どもさんたちが僕のこと覚えていてくれて登下校時に、こんにちは!と声をかけてくれる」と関戸さんは微笑みながら話してくださいました。



関戸花園前の通学路には、タイヤを使って植えた花々が並びます。捨てられているタイヤを活用しようと関戸さんが考案したものです。

今年は 5 月に、授業で使う夏野菜の苗を学校に持っていったことをきっかけに、トマトやオクラ、キュウリの植え方を関戸さんが子どもたちに教えました。子どもたちには、野菜を自分たちで育ててみて、自然のままのすがたを知ってもらいたいという関戸さん。そこには、店頭で並んでいる、傷がなくきれいな見栄えの良い野菜たちを作るため、農家が様々な工夫をしていることを学んでほしいという思いがあります。



孫もキュウリは好きではないけれど、自分で水をやっていたら、食べた。やっぱりそういうことが大事だよと関戸さん。

■ 横浜の花農家として、2027年国際園芸博覧会への思い

2027年、横浜市で国際園芸博覧会（GREEN×EXPO 2027）が開催されます。1859年の開港以降、横浜は日本の花き貿易の先進地として歩み続けてきました。この地で長く続く花農家として関戸さんは、「花を植える人が増えて、需要が多くなってくれば花農家業界全体が盛り上がるからね。それが正直な話、一番いいです。注目度も高いからね。ただ、変わったものだけじゃなくて、博覧会では一般的な草花もたくさん使ってもらいたい。一般的な草花も少しでも需要が増せば農家としてはいいと思う」と話します。

被災地での活動を行い、地元の小学校との交流を続けている関戸さんが話す「花の力」とは、人の心を豊かにし、人との関わり合いを生むものなのではないでしょうか。GREEN×EXPO 2027をきっかけに、横浜市で暮らす子どもや大人が、花の力を通して豊かな社会を醸成できたらと思いを巡らせました。